

は何であるのかよく知らないが、フランスクリット語などに通曉し、それが天台山下の専門職とみとめられていたのではなからうか。

宋祁の集は百巻とも百五十巻ともいい、現存するものは九十巻、あまり多くて、通読のいとまをもたないが、見たかぎりではその詩はすべし『四庫提要』が『博輿典雅』、具有唐以前格、殘膏賸馥、沾句靡窮、というのにはよく当っている。

△雑記・97V 唐詩宋詞欣賞

標記の本を一九七四年四月二十四日に購ったままほったあつたのを紹介する。作品には標音符号をつけ、「作者」「注釋」「語譯」の三項に分けて簡潔に説明する。李賀の「作者」の項。

李賀字長吉，系出鄭王後。七歲能詩章。韓愈皇甫湜始聞未信，過其家，使賀賦詩，援筆輒就，如宿構，自目曰高軒過。自是有名。爲人纖瘦，通眉長指爪，能疾書。每旦日出，騎弱馬，從小奚奴，背古錦囊，遇所得，書投囊中，及暮，歸尺之。非大醉不喪，日率如此。辭尚奇詭，所得皆驚邁絕去翰畦逕。當時無能效者。樂府數十篇。雲韶譜工，皆合之絕管。卒年二十七。賀詩魂魄天成，富想像，美音節，雖若不可理解，而使人纏玩無已。王思任昌谷詩解序云：「賀既孤憤不遇，而所爲嘔心之語乃日益高渺。寓今託古，比物微事，大約言悠悠之輩，何至相嚇乃爾？人命至短，好景盡，故以其哀激之思，變爲晦澀之調。」

「注釋」は省いて、「語譯」を列挙する。漢字表記はかえたところがある。

雁門太守行 黑獸獸的戰雲並帶雷賊上，敵人的城池已快被打破了，戰甲的光彩閃爍着，向晉陽光，金屬的鱗片打照了，在秋光籠罩下，号角的声音充滿着空間，迎塞地方的燕子在夜裏是紫色的。

1976.6.5.

，輕兵追敵，半開捲的紅旗一直靠近易水。霜寒重，重用的厚恩，拿着宝剑為國效勞，願意為君王而犧牲。

四月（十二月樂詞之詞）朝晨涼爽，夜裏也涼爽，樹葉如蓋，所有的山一片濃綠，生長在雲外，下管微微的春雨，綠烟氤氳，肥葉大花照着曲門，全塘的靜水動盪着碧綠的漣漪，春天景色到了夏天再也見不到花燕的飛翳了，只見到墜落的紅花，和那殘剩的花萼，參差不齊的點綴着。

浩歌 天地造，南風將山吹成平地，造物的上帝更派遣天吳，移動着海水，王母所駕的桃花可以編紅千万次，彭祖巫咸可以幾百年不死，但人生在不及百年，值此青毛和驄馬跑遍天涯留下參差足迹，大好的春光，楊柳樹含着細煙。彈琴的玉人勸我多喝幾杯酒，她說人生於世，倏過一世，不能長久何必太認真。勸你不必浪飲吧——丁都護，世上的英雄，本來就很免得其主的啊！要想今世遇到好主人那只有買此絲線重繡趙國的平原君了，為懷念平原君就讓我們用酒來祭祀他吧！漏壺的水一直滴個不停，催促着月兒早落下，酒娘的頭髮已經稀薄得不能再梳了。看到了秋天的山已長出了新的綠景，找這年青有為的兒子漢怎能再受役於人呢？

秦王飲酒 秦王騎着虎巡遊八荒，他佩帶着的寶劍，照射着天空上天自然碧藍。太陽敲着太陽飛出了玻璃的聲音，浩劫的灰塵飛盡從此天下太平。在大籠頭刺着酒激調各個酒壘來喝，金樽做成的琵琶聲夜裏響個不停，洞庭湖的雨水因聽到笙聲而來。酒喝到暢快時，但願月亮能倒行，天空上白絮密佈，東方已呈現了魚白色，可是宮門的掌事却報才口一更時分呢！花檝上玉鳳的歌聲是那麽嬌弱叫人憐。海棠的花香清香淡雅，黃蝶跳着舞，並拿起酒來預祝千秋長壽仙人樹的蠟燭噴出輕微的火烟，神女青琴已感動得眼淚泓泓流呢！

金銅仙人許漢歌 漢武帝的陵墓上突然來了秋風客，夜裏聽到馬叫聲，天亮時却找不到蹤跡，昔日雕飾的欄干旁的桂樹上開放着秋香的花，三十六宮的地方已生長着土花和綠草。魏朝的宮官牽着馬直宿千里外的地方走，走出了東關，凜烈的密風刺人的眼睛，金銅人空為漢朝而出了宮門，如今君上已死，回憶起來，不免掩下了眼淚。記得昔日要送到關外去時，好多的宮女送行於咸陽道上，那種離情別意，上天如果是有情的話，上天也會因此而變老的，携帶着捧露盤上的玉人独自來到這荒涼的地方，離開渭城已是很遠了，渭水的水聲到此已是很小的了。

老夫採玉歌 採玉啊採玉啊，一定要採到碧玉啊！把它雕成步履，徒然顏色好看啊，我寫採玉老翁，忍飢受寒，一心一意只愁下雨，一下起雨來，藍溪的水流就并別不出清白，我也只好在山頭食蔡子過日，杜鵑悲傷而啼血就如同我的眼淚啊。藍溪的河生不喜歡新人，一不小心身死河裏，千年後仍痛恨着溪水。山腰處，風雨吹打在柏樹上發出了嘯叫聲，倒泉如掛繩，綠烟裊裊，天氣寒冷了屋頂成白。我想起了家裏幼小的嬰孩，坐在古臺石上可憐着我那些在家的孩子們，不知道他們將如何過冬？

黃家洞 急促的行車任沙上走響發出了促促的聲音，軍士們個個帶着四天的角弓佩帶着青石做成的箭頭，軍旗閃閃，銅鼓大鳴，大聲地作猴猴的啼叫聲，搖動着盛箭器，頭上戴着彩巾，脛上綁着布帶，爬在半斜的山腰上，溪頭地帶，射劍隊就像葛花盛放一般。晚間山澗裏白霧籠罩，敲打鼉鼓好像邊裏的白鼉在狂叫着，竹做箭像飛蠶一樣直射着金沙，到最後閒適的趕着馬緩慢回家，官軍出戰不得真筭，却誤殺了空州蛋呢！

公孫舞歌

鴻門宴上，方形的花磚，古香的柱礎，整整齊齊排着九根大柱，紅色的酒有如刺豹淋

血一椽盪在銀做的酒杯裏，盛大的鴻門宴就在此舉行，吹打着戰鼓，但沒有蕭管之來奏樂，四辺都是長刀直立，見不到鳴琴和古箏的彈奏。屋上的橫樑，地上的粗錦，紅色照人，陽光照着大笑的項王，而項王仍然未醉呢！范增一再的看看腰下的寶劍，示意項王殺沛公，最後項莊更即席起舞，欲刺殺沛公，皆未得逞。你這材官小臣何必要起舞呢！座上的真人是赤帝的子孫啊，他所居的芒碭地方，瑞雲迴天，咸陽王氣清如水，正是漢室該興盛的時候啊！想想當初的秦都咸陽城，鐵樞鉄健重地守護着，而漢王一人，率着大軍一下把它打垮。所以照理來講，漢王今天忝佩帶着秦王玉璽統治秦地，他却不要麼做，這種對大王絕膺刎腸的中心啊，你大王却不憐憫呢！

感賦 南山地方，陰雨綿綿，濕着空草，宛叫連天，多麼地悽慘啊！長安夜裏，突然颯起了半夜秋風，不知風前又有那些人由年青而變老，雲霧低照，濛濛迷迷的黃昏小道，只見青椽樹，散出衰暮的水氣，深夜月正当空照樹木無影子，所有的山脈只是白茫茫的一片，漆紅的火炬迎接新人，在幽壙裏，好像擾擾的營火呢！

苦昼短 飛光啊！飛光啊！你是那麼地流轉個不停啊！讓我敬你一杯酒呢！我不知道青天有多高，我也不知道黃地有多厚，我但見月密日暖，時時催促着人們的壽命。食熊的人就肥胖，食蛙的人就瘦弱，那還有什麼神君的存在，那何以有上天的主宰呢？假使真的上天的東方有棵若木的話而其下置着燭燭的火龍（指太陽，云若木為其所入處），我將要去斬掉龍足，嚼食龍肉，使它朝暮不能迴轉，晚間不能入地，如此一來，那年老的人也就不会死，而年少的人也就不会哭了。如此一來，那何必再為長壽而食白玉和黃金呢？人人都長壽，還管他誰是任公子，在雲中騎白驢？話雖如此，終是幻想，看茂陵還不是埋葬着漢武帝的白骨，而秦皇的屍骨也埋在地裏腐臭呢！人的壽命終究

是如此的短啊！

巫山高 巫山之上綠樹叢叢，上穿天空，巫山之下，大江浪濤翻滾，水瀾漫，旅遊在楚的孤魂（遊子）到此尋夢，寒風颯然，曉風飛雨的吹打，山路上生着滑碧的青苔。嫦娥一去離此已是一千年，如今只有丁香筇竹和啼叫的老猿。山上的古廟高聳於天，接近月亮，但覺月宮寒冷，椒花墜落在潔溜的雲彩間。

神絃曲 西山的太陽已下降了，東山昏暗迷茫，這時神的旋風吹着神馬，神馬在雲上行走。節曲的琴瑟和淡的管絃声音相滲雜，神穿着花做成的衣裳，繚繞地走在秋壺上。風飄着樹葉，樹子紛紛下落，秀萼無比，野地裏青色的鬼狸啼哭，為着神狐已死去了。古壁上刻畫着彩龍金屬變尾，更有雨工騎進秋潭水，年歲大的鷓鴣成了木怪，哭声裏碧綠的火光從嶺裏飛噴起來。

神泣 女巫洒着酒，神來時雲滿空，燒香的王爐的炭火香氣四溢，祭神鼓聚聚聲，海神山鬼來空中，紙錢窸窣的響着，更成旅風飄飛而上。巫女彈着相思木刻畫着金鸞的琵琶，欲起娥眉一次再彈一次，呼星召鬼來掀杯盤，山鬼求食時人有一種森寒的感質，終南山的日色已低於平灣了，山神常在有与無之間。神高興了，神喜躍了，主祭的人也顏色開朗，最後送着萬神騎神馬回青山去。

官不來題皇甫漫先輩 官不來，官庭裏有如秋天一樣，寂寥冷落，老桐樹的樹枝交錯成陰，青龍閒愁。書司佐吏行走遲慢，再次問佐吏「官來否」，如果官不來，找這門庭就得常年寂靜幽深了。

（この本の編者は杜明、「唐詩宋詞欣賞」が二五八頁、その外「唐詩三百首讀本」と朱自清「唐詩三百首讀法指導」ありて三八〇頁が合綴してあり「中華民國五十八年八月初版」台北から出た。わたしは杜明なる人を知らず、右に引いた語訳が實際にその人の作なのかどうかむしろぬ。

語訳に示された解釈には従えぬところはあるが、この作業は詩人の手になるものと感じられた。「唐詩欣賞」は書宛物からはじまり劉禹錫・白居易・杜牧・李商隱と進み、そこから突然張九齡にゆき……といったふうで、本の表紙のケバケバしさもあわせて、たぶん「まともな学者」は手にとってみることもせず、たとえ手にとっても普書中に採りあげることにはあるまい、という感じがするので、ここに紹介することにした。この種の翻訳は骨折損のくたびれもつけみたいなのがつきまとうものだけに、作業者はいとわずに情熱を注いでいるようで、気持がいい。

六月十一日、書店で新版の『唐詩宋詞欣賞』を見た。編者名はなく、標音符号を削り、「唐詩欣賞」なく、朱自清の文章のかわりに他の人の文章がはいっている。

わたしのもっている版式のものももう出ないとする。この雑記は、偶然のことながら、時宜をえた（？）ことになる。拙い一文を、削られた「唐詩欣賞」に対する哀惜の辞とする。

▲雑記・98V 『タテガキで読んだライ』

1976.6.11

一九七六年六月八日、原田尚雄「タテガキで読んだライ」を贈られた。雑誌「養生」昭和四十七年六月号から昭和五十年二、三月号まで二十九回にわたって掲載され、凡て二二九頁、原稿用紙約七〇〇枚で、一六世紀初から二〇世紀初までの日本人著作の医学書からライに関する記述を抄出訳解しつつ、その間におけるライ診療の歴史を検討し、今日の現状に対する反省考察を探求している。本書はその抽印合綴本で二十五冊中の一冊である。

わたしは雑誌に掲載されたその第一回から第二十九回まで洩れなく読んだ。読むたびに筆を進める著者の夜の「にがさ」をまざまざと感じてつらかったが、そのにがい夜の向うにかれをそこ

へ突きやるものが存任している現実を思うと、読まずにはどうしておれなかった。

ライと幸傳と何の関係があるのか、とたずねる方が仮にあるとしても、いまは説明も言いわけもせずに、この本から少し書きぬくことにする。

ういの勉強をはじめて二十年あまりがすぎた。近頃、また、あらためて、ういの恐ろしさを思い知らされてゐる。日常、ういの診療で、苦しい思いをさせられてゐることが多いせいか、それがどんな古い本であっても、同じ苦しみを述べた言葉には、時代をこえて共感させられる。医学史の上に有名な医者であっても、ういに関する文章が、単に古今東西の医書のウケウリであるときは、それがいかにも博學であるとはいへ、臨床医の私にとつては、それ程らしい。家伝とか秘伝とかいわれるういの療治書であっても、臨床の苦しみがこめられていないものは、私にはむしろ、しらじらしいものとしか感じられない。このごろ、私は、ういについては、患者にむきあって、そこからわきでる哀歎にうらうちされたような、そんな文献や報告を見聞することがすくなくなつた。たしかに、いいことを言つてゐるのだけれど、実際に苦しんでゐる病人にとつて、そんなやさしい言葉が、何の救いにもならない、といったものが多いのである。そんなとき、たといそれが昔の本であり、それを書いたのが無名の医者であろうとも、その臨床の眞実さに共感をおぼえ、それがまた、いまの私の臨床の助けになるといった記事が、たまたまなくなつてくる。

(一頁)

……しかし、いま私は、おぼろげではあるが、ひとつのすじみちをたどれる思いがしている。人々ぐらいを恐れるのは、根柢がないわけではなく、実は、うい者への畏敬として、つまり、は

るか昔、らいを病む人は、特に威霊高き者として尊敬するのあまけ、恐れたのではないかと、といふ点である。人々が、神を敬し、神を恐れるのと同様に、らいを恐れようには思える。中古、らい者を「ものよし」と呼んでいた。「ものよし」とは、元旦に、天子が臣下に拝類をたまわることであった。それと同じ言葉が、らい者に用いられたこと自身、意味深いものがあるようである。五節句になると、街へらい者があらわれて、「ものよし」といい「おとらしや、花の供御」と呼んだ。人々は争うて、米や錢を「ものよし」に捧げたという。乞食の形態の以前の姿をたどると、明らかにそれは、「来訪神」「より神」の姿ではなかつたか。「ものよし」は、類に袋をかぶり、穴から眼だけ出している姿が古い。これは病みくずれた類をかくすためと、後の世の人は、さかしらに思ったが、実は、その袋自体、仮面同様、神を表わすものであつたはずである。威霊高いものほど恐れ敬ふことは、らいにがぢらず、非業の死をとげた人々を御霊とまつる日本の信仰であつた。生きながら、非業の病いを負つた人は、靈力高く、そして、外部から来る「毒霊を防ぐ力があると、おそろく信じられたことでもあろう。村の境にらい者をおいたのも、はじめはそのあたりの信仰があつたようである。

御陵に仕え、神に近いはずの陵戸の民が、のちのちけがれ多いものと差別された。神と共に遊ばわびおきが、一部の人々に伝承され芸能化されると、遊芸の徒としてやせめられ、河原者として差別された。神にはえる巫女が、遊行のはてに遊女となつて定着すると、そこに厳しい差別があつた。このようなフロセスを思つと、らいを病む人もまた、これと似た経過ののちに、零落していったと思われる。現代的可感度で、讀みなして「偏見」ときめつける前に、このような第

民の中のらしい意識の伝承を、はっきりさせることが大切ではないか。それが実は、偏見との戦いの中で、最も深層の部分でもあろうか。

今日の感覚で、桜の枝を折る日本人がいつも非難される。たしかに、それはよいことではない。だが、なぜ桜に限って、あんなにも日本人は枝を折るのだろうか。いやそれよりも、何故日本人は、山に、寺社に桜を植えたがるのだろうか。なぜ、桜だけを、あれだけ花見にゆくのだろうか。私は、これもまた大胆にすぎる独断ではあるが、「みくまりの神」の御心が、例年、桜花によって示されたのだと思っている。人々は山に咲く花を、神の心とし、花の咲く日を中心に農耕をはじめたのではないか。花見とは、その年の農事を占う祭りであり、神意を花によって占った上、神の「よりしろ」として、桜の一枝をもちかえったのではないか。山のない土地の常民は、社に桜を植え、その花の咲く下で、田楽という予祝をしたはずである。京都の西陣で生まれ育った私が、桜が咲くと、町内こぞって氏神である今宮神社へ「お千度」と名付けて行ったことも、今から思うと、神社の祭でけなく、常民の祭りであったのだ。その今宮の桜は、私たちによって折られしなかったが、ほるか昔であれば、その一枝がうやうやしく神の「よりました」として、人々に守られながら、町内へ運ばれたことであろう。日本人の心の奥底に、桜をみれば一枝手折る、信仰が一すじあるのではないか。

病床に一折りの寿司島は花見にて

(ニニハニニ九頁)

りの才藝の一齋を提示したものと見え、その一方向的に、昌谷詩を独吟句とみるわたしの説を創作の面から支持されたもの、と見ておきたい。各句の第一字はコバルト色で他はすべて黒色である。

・頌春

閏昭和五十一年丙辰六白金星沙中土元旦

火祭や既に凍てたる檻の鶴

宵網子

龍陽のほほゑみをわかつてよ

漁童亭

昇来口こころ荒野の忘れ霜

煙翹齋

天網にしもなんぢ洩れたり

潭鏡館

六花とよ唇に咲くはけき星

瑤匣人

白馬を馭しそののち知らず

風松子

金壺したたれり傾くわが齡

螢星亭

星唇のなにかなしかるらむ

短笛齋

沙汰なしに巻の筒鳥初名吉

石根館

中宵に楯わかばひるがへる

天影人

土遁より水遁あはれ山棟蛇

嶋表子

一期一會のくれなゐを引き

蕨帳亭

樹蔭ああきみがおぼれし潦

杏蓼齋

百味とて愛ゆるににがけれ

漂旅館

獲るからすむぎ、黄泉の火祭

蘆宿人

△雑記・100V

帰郷

1976.6.12

一九五六年夏、わたしは李賀の「春帰昌谷」「昌谷詩」について「帰郷」と題する一文を草し「方向」第六号（同年九月二十五日刊）にのせた。「昌谷詩」を独吟聯句と考えたのはそのときだ。考えはあやまっていたのではないと信するけれども、「帰郷」そのものはきずだらけで全面的に書き改めなければ今のわたしのとして人前に出せない。それをこの号でも思ったが、用意不足で手がつかぬ。ここでは、その予備的な覚書を順序もととえずにほうり出しておくだけである。

荒井健『李賀』付載「李賀年譜」に記す賀の帰郷の次の四条である。

元和5庚寅 80 20歳 河南府（洛陽）の、官吏採用試験の地方予選に合格。中央の本試験

（進士料）を受けるため上京したが、受験資格を奪われ、昌谷へ帰った。

元和8癸巳 83 23歳 春、病気を理由に辞職し、昌谷へ帰った。十月、洛陽に出て皇甫湜と会った後、再び上京。

元和9甲午 84 24歳 長安から昌谷へ帰り、七月には友人の張徹を頼って潞州へと旅した。

元和11丙申 86 26歳 潞州から昌谷へ帰った。

この年譜は朱自清の「李賀年譜」を修訂簡約したものと想われるが、いずれも問題はそのことである。その問題を「帰郷」という場面から眺めることもでき、そうするために「帰郷」に関連する賀の詩をひろく出しておくことが便宜だろう。

示第 1005 （元和八年作未詳）

- 始為奉禮憶昌谷山居 1008 (元和六年作 未詳)
 南園十三首 1046 ~ 1058 (元和八年作 未詳)
 金銅仙人辭漢歌 2059 (元和八年作 ? 未詳)
 酒罷張大徹索贈時張初劾潞幕 2093 (元和九年作 未詳)
 仁和县雜敘皇用湜 2095 (元和八年作 ? 未詳)
 勉愛行二首 2098 2099 (元和八年作 未詳)
 致酒行 2100 (元和五年作 未詳)
 昌谷北園新笋四首 2103 ~ 2106 (元和八年作 未詳)
 感興五首 2108 ~ 2112
 三月過行宮 2113 (元和八年作)
 昌谷詠書示巴童 3123 (元和八年作 未詳)
 巴童答 3124 (元和八年作 未詳)
 出城 3126 (元和五年作 未詳)
 將發 3128 (元和九年作 未詳)
 潞州張大宅病酒遇江使寄上十四元 3133
 王濬墓下作 3137 (元和九一十一年作 未詳)
 客遊 3138 (元和十一年作 未詳)
 河陽歌 3148 (元和九年作 未詳)

- 開卷歌 3156 (元和五年作 未譜)
 - 春歸昌谷 3164 (元和八年作 未譜)
 - 昌谷詩 3165 (元和八年作 未譜)
 - 銅駝悲 3186 (元和八年作 未譜)
 - 自昌谷到洛後門 3167 (元和八年作 未譜)
 - 七月一日晚入太行山 3168 (元和九年作 未譜)
 - 北中寒 4185
 - 送韋仁實兄弟 4195 (元和八年作 未譜)
 - 洛陽城外^別皇雨湫 4196 (元和八年作 未譜)
 - 長平箭頭歌 4199 (元和九年作 未譜)
 - 京城 4213 (元和六—九年作 未譜)
 - 題歸夢 4217 (元和六—九年作 未譜)
 - 經沙苑 4218 (元和八年作 未譜)
 - 出城別張又新酬李漢 4219 (元和八年作 未譜)
 - 高平縣東私路 5235 (元和九年作 未譜)
- 「未譜」が推定するこれらの作時は以後の研究でも多く踏襲する。しかしさきにも言ったように「未譜」そのものに問題があるのでこの作時もそれぞれに再検討しなければならぬ。
- 質の作品中、年次の明記されたものは「送沈亞之歌」の二首があり、その序文にいう……